

第16回全国障害者スポーツ大会（希望郷いわて大会）

大会期間：平成28年10月22日（土）～24日（月）

全国障害者スポーツ大会は、障がい者が競技を通してスポーツの楽しさを体験するとともに、国民の障がいに対する理解を深め、障がい者の社会参加の推進に寄与することを目的とした障がい者スポーツの祭典ある。（希望郷いわて大会HPより引用）

希望郷いわて大会期間は、個人競技（陸上競技・水泳競技・アーチェリー・卓球（サウンドテーブルテニスを含む）・フライングディスク・ボウリング）、団体競技（バスケットボール・車椅子バスケットボール・ソフトボール・グランドソフトボール・フットベースボール・バレーボール・サッカー）、及びオープン競技（ビリヤード・卓球バレー・ゲートボール・ペタンク）が実施される。

大阪府・大阪市・堺市の代表選手は、5月、6月に行われた障がい者スポーツ大会において選考され、全国障害者スポーツ大会に向けて、個人は元より各競技の練習会でも頑張っています。

ぜひ皆さん！応援よろしくをお願いします。

協議会からのお知らせ

大阪障がい者スポーツ指導者協議会は、今年度で25周年を迎えました。

よって、「25周年記念講演」を平成29年1月29日（日）に、

近畿大学水上競技部・監督の山本貴司氏を、お迎えし開催いたします。

詳細につきましては、後日、協議会会員の皆様に案内を送ります。

大阪障がい者スポーツ指導者協議会

協議会だより

編集・発行 大阪障がい者スポーツ指導者協議会 広報部 平成28年9月1日 第76号
<http://osaka-adsppo.org/>

【報告】大阪障がい者スポーツ指導者協議会 平成27年度年次総会

平成28年4月17日（日） 場所：大阪市長居障がい者スポーツセンター 2階 会議室

◎平成27年度 事業報告について

1 事務局

- ① 理事会の開催：協議会の運営体制やボランティア協力体制の調整を行うため理事会を14回開催した
- ② 大阪府内の障がい者スポーツ大会・イベントに協力を行った
- ③ 第15回全国障害者スポーツ大会への参加（参加する選手へのサポート）
- ④ 平成27年度大阪市障がい者スポーツ・レクリエーションひろばへの協力
- ⑤ 平成27年度の日本障がい者スポーツ協会と、各都道府県の障がい者スポーツ指導者協議会の全国会議に出席

2 研修部 ・研修の開催：平成27年11月7日（土）ゴールボール競技のルールや指導方法の研修

3 広報部 ・広報紙「第74号」「第75号」を発行

4 企画部 ・障がいのある方とその家族、介護者。または障がい者スポーツに興味のある方を対象に、平成27年10月11日（日）第4回スポーツいろいろカーニバル・平成28年1月10日（日）「新年のつどい」羽子板の体験コーナーを行った

◎平成28年度 事業計画（案）について

1 事務局

- ・各種ボランティアの要請・各種発送業務について迅速な対応・対処することとしたい。
- また、協議会の会員が意欲的にボランティア活動やスポーツ指導をして頂けるよう努力したい

2 広報部

- ・協議会だよりに、身近な障がい者スポーツの紹介等を載せ情報を提供する。また、ホームページから情報も提供できるようにする。

3 研修部

- ・障がい者スポーツ指導の実践で役立つ内容と、日本障がい者スポーツ協会が定める競技種目を中心にした研修を、年1～2回行いたい。

4 企画部

- ・大阪障がい者スポーツ指導者協議会として、障がい者スポーツのイベントや大会が行えるような企画・案を考え実行できるよう努力したい。その一環として「スポーツいろいろカーニバル」・「新年のつどい、羽子板コーナー」の継続と、各種障がい者スポーツ施設等とタイアップして行えるような行事を検討する。

菅原智彦	相原繁樹	松田恭子	部員	福島美沙季	企画部長	仲本清文	部員	福西拓也	研修部長	永島久義	部員	松浦春代	広報部長	新川豊美	兼田理香	部員	久保漣	事務局長	中野薫	会計	鈴木光一	副会長	松本晃	会長	平成28年度役員
------	------	------	----	-------	------	------	----	------	------	------	----	------	------	------	------	----	-----	------	-----	----	------	-----	-----	----	----------

「パラリンピックの魅力」



講師 (公財) 日本障がい者スポーツ協会 強化部長
 日本パラリンピック委員会 事務局長

中森 邦男 氏

東京 2020 オリンピック・パラリンピックの一番のレガシーは、どんな人(子どもから高齢者、障がい者)でも受け入れられるインクルーシブな社会の創造である。身近な場所でスポーツに参加できる環境が整備されることである。

パラリンピックが発展してきた理由は、その創始者であり、パラリンピックの父と呼ばれるグッドマン博士が広めた有名な言葉「失われたものを数えるな、残された機能を最大限に生かせ (It is ability and not disability that counts.)」に集約されている。

スポーツの価値は、ひとつは身体運動の日常化による、生き生きとした活動で、元気に日常生活・社会生活を送ることができることにある。二つ目は一緒に楽しむ仲間との交流による良好な人間関係の構築である。三つ目は、エリートスポーツでは、目標設定と最新の医科学に基づいた厳しい練習とその成果を発揮する大会の参加、この繰り返しに起こる、「成功体験と失敗体験」、さらに競技力向上のための課題への挑戦となり、これが心を鍛え、目的を持った生き方の経験となる。パラリンピックは、まさに、目的を持って、残された機能を最大限に生かしながら競技力向上を目指すことにある。

パラリンピックは、障がい者のリハビリテーションからエリートスポーツ、そして現在は、オリンピック同様の強化が求められるように発展してきた。例えば陸上競技の下肢切断(義足)男子の走り幅跳びの世界記録は 8m45 で、日本記録の 8m25 を大きく超えている。これは、オリンピック招致にパラリンピック開催が義務づけられたことで、北京 2008 パラリンピック競技大会から、パラリンピックの価値が一気に高まり、選手の競技力も大幅に向上することとなった。パラリンピックは現在 22 の競技が実施されている。参加できる障がいの種類は、視覚障がいと肢体不自由の身体障がい者と知的障がい者で、競技によって参加できる障がいの種類や程度により異なっている。

スポーツとしての魅力は、先に挙げた陸上競技における下肢切断者の義足の改良によって、オリンピックに参加できる選手も現れている。視覚障がい者のサッカーでは、見えないにもかかわらず素晴らしいパスやボールが足から離れないドリブル、そして美しいゴールを決めることも珍しくない。車いすバスケットボールやウィルチェアラグビーでは、選手同士の激しいぶつかり合いも競技の醍醐味のひとつである。それぞれの競技にスポーツとしての魅力が多く存在している。

6 日本における障がい者スポーツの発展 ※許可得て、基調講演資料より引用

障がい者スポーツの発展	障がい者スポーツの発展	障がい者スポーツの発展
東京パラリンピックの開催 (1964年)	日本における障がい者スポーツ発展の契機 JPSAの創設 全国障害者スポーツ大会の開催 全国障害者スポーツ大会の開催	1965年 日本身体障害者スポーツ協会の設立 1965年~ 全国身体障害者スポーツ大会の開催 1962年~ パラリンピック、国際ストークマンデビル大会への派遣 1968年~ 指導者の養成
障害者スポーツセンターの創設 (1974年)	在宅の障がい者がスポーツに参加できる環境 現在全国に23ヶ所 (JPSA協議会) 障がい者スポーツの支援体制 (専門委員会) 設置	1975年~ フェスピック大会 (アジアパラゲームズ) への派遣 1981年 医学委員会 (専門委員会) の設置 1997年~ スポーツコーチ研修会の実施
長野パラリンピックの開催 (1998年)	選手強化体制の整備 日本パラリンピック委員会の発足 (選手強化体制) スポーツ医制度、科学委員会の設置	1999年 日本障害者スポーツ協会に名称変更・JPCの発足 2002年 科学委員会 (専門委員会) の設置 2003年~ スポーツ医制度の実施
アテネパラリンピックの参加 (2004年)	選手強化が強化 競技団体による強化 医科学情報サポート スポーツトレーナー制度	2005年~ 競技団体に対する強化事業 (強化費の配分) の実施 2005年~ 科学的強化支援事業の実施 2009年~ スポーツトレーナー研修会の実施 2011年~ 医・科学・情報サポート推進委員会の設置
スポーツ基本法成立 (2011年)	オリンピックと同じ仕組みの選手強化が採用される 競技団体に対する強化費の増額 マルチサポート事業 日本スポーツ科学センターの事業	2011年 スポーツ基本法 (50年ぶりのスポーツ振興法の改正) 2012年 スポーツ基本計画の発表 2013年 JPSAによる「日本の障がい者スポーツの将来像」公表 2013年 東京2020オリンピック・パラリンピック開催決定 2014年 厚生労働省から文部科学省に移管 2015年 スポーツ法の設置

内容	健常者	競技団体	日本パラリンピック委員会	文部科学省
強化計画 練習・トレーニング コーチ・スタッフ フィジカルトレーニング 栄養・メンタル強化 体力強化・動作解析 動画サポート 科学的強化 データ・科学的強化	日常練習 科学的強化	競技強化計画の立案 強化体制の構築 強化費の確保 選手の育成・教育 指導者の養成	科学的強化計画の立案 強化体制の構築 強化費の確保 選手の育成・教育 指導者の養成	科学的強化計画の立案 強化体制の構築 強化費の確保 選手の育成・教育 指導者の養成
1 選手の日常強化環境	障がい者のアスリートの強化環境は、驚くほど貧しい。			
健常者のアスリート	障がい者のアスリート			
● スポーツ少年団でスポーツ参加 ● 競技によって全国大会や国際大会もある ● 学校 (中・高・大) のクラブ活動が盛ん ● コーチ・練習場所が初めから存在 ● 中・高・大・インカレが盛ん ● スポーツ大学では医科学の支援も充実 ● 県・市・町・区・高校生の強化を実施 ● 水泳など種別スポーツも盛況 ● ブロック・県・地域・日本と競技レベルに ● 競技会が存在 ● 日常練習に医科学の支援スタッフも存在	● スポーツ少年団に参加できていない ● 学校 (中・高・大) のクラブ活動が脆弱 ● 視覚障がいや知的障がいでは実施 ● クラブがほとんど存在しない ● 少人数のグループで活動 ● 練習場所が少ない (選手が自分で探す) ● コーチが少ない (選手が自分で探す) ● 障がい者スポーツセンターの強化支援はできていない ● 競技力が向上して、初めて中央で医科学の強化を体験する。 ● 競技会数が少ない、レベル別は存在しない ● 日常練習の医科学のスタッフは脆弱			



壮行会♡おじゃましました

一ノ瀬メイ選手 ♥♥♥ 津川拓也選手・生長奈緒美選手・廣田真一選手

平成28年7月7日(木)、一ノ瀬メイ選手の壮行会が行われ、決意表明を聞くことができた。

7歳の時から、パラリンピックを目指し始めた。パラリンピックの水泳選手になることが夢と言っても、誰もパラリンピックを知らない状況だった。小学校6年生の頃には、日本選手権などで優勝することもあった。しかし、おめでとうの言葉もかけてもらったことは無い。悔しい思いでいっぱい。その悔しい思いを水泳にずっとぶつけてやってきた。

大学は水泳を、めいいっぱいやれる大学に進学しようと決めるが、いくつかあった大学の条件は健常者中心である。けれど、山本監督に「よっしゃ！一緒にパラリンピックの表彰台の真ん中を目指してやる」と言ってもらったことで、近畿大学に決めた。

水上競技部では、1年の時に先輩から応援を習う。いつかあの練習した応援の中で自分も泳いでみたいとずっと思っていた。その夢が選考会で叶った。練習に励んで、臨んだ選考会でベストが出て、リオデジャネイロの出場権を獲得することができた。

初めて出場するパラリンピックは、個人種目(6種目)と、リレー(2種目)の合計8種目に出場予定である。個人種目では、全種目自己ベストを更新するという目標を掲げている。

また、近畿大学水上競技部の歴代メダリストの方々から、激励の言葉を頂戴すると、「今は、まだまだだけれど、これから先輩方みたいに、立派なアスリートになれるように頑張りたいです。」と笑顔でお礼の言葉を述べた。



近大水上競技部ワンパ



協議会のメンバーも激励に駆けつけた



平成28年7月31日(土)大阪市長居障がい者スポーツセンターにおいて、津川拓也選手、生長奈緒美選手、廣田真一選手のリオ・パラリンピック出場を祝い、壮行会が行われた。

生長選手は3回目(北京・ロンドン・リオ)、津川選手は2回目(ロンドン・リオ)、廣田選手は今回初めてと、毎回大阪およごう会からパラリンピック出場が続いている。1つのクラブから3名の選手が出ることが素晴らしい。スタッフを含め、選手が泳ぎやすい雰囲気、環境を作っている結果だと思う。等々、応援する方々からメッセージを頂いた。

そして、生長奈緒美選手：気づいたら3回目の出場になっていた。今回はいろいろな思いがあったが、日頃から支えてくださっている方々に、感謝の気持ちが表せるような泳ぎが出来たらと思います。リオでは力を出し尽くして頑張ります。

津川拓也選手：100m 背泳ぎ、200m 個人メドレーに出ます。自己ベストを出し決勝に残りメダルを目指して頑張ります。応援よろしくお願いします。

廣田真一選手：パラリンピックに出るのは初めてです。100m 平泳ぎにでます。決勝に残れるように頑張りますので、応援よろしくお願いします。と決意表明が聞かれた。

大阪およごう会代表・西原成幸さんより
 大阪およごう会は、大阪市長居障がい者スポーツセンター(日本で初めて身体障がい者専用のスポーツセンター)昭和49年開館2年目からの水泳クラブである。全国身体障害者スポーツ大会が、一生に一度の参加しかできないことを知り、それならば自分たちで大会を作ろうと、大阪およごう会が中心となり全国に声を掛け、約11都道府県からの参加で近畿大会を開催した。1984年(昭和59)には、第1回日本身体障害者水泳選手権大会を開催し、今年で33回を迎えるまでに成長した。